

【臨床・研究】

レビー小体型認知症の自律神経症状
および睡眠に関する検討おか だ かず のり
岡 田 和 悟

キーワード：レビー小体型認知症，睡眠障害，自律神経症状，起立性低血圧

要 旨

認知症の第2位を占めるレビー小体型認知症（DLB）自験25症例について，睡眠，自律神経症状に関するアンケート調査を実施し，アルツハイマー型認知症（DAT）18例およびパーキンソン病（PD）17例と比較検討した。DLBでは，自律神経・睡眠異常を呈する率が32~68%とDATと比較して有意に多く認められ，PDと同様のパターンを示し，特に睡眠関連の症状が目立った。ヘッドアップティルト試験では，起立性低血圧を示す例が，DLB 68.8%・PD 72.2%と同程度で，両者はDAT群の23.8%に対して有意に高率であった。DLBは全身疾患として自律神経症状や睡眠障害なども含めた多彩な臨床症状を示すため，各項目に関する問診が診断への手がかりとなる可能性がある。

はじめに

2013年の厚生労働省研究班による報告¹⁾によれば，現在の本邦の認知症患者は460万人に及び，予備軍である軽症認知障害（MCI）400万人を加えると，65歳以上の4人に1人が認知症とその予備軍と考えられ，今後の高齢者の増加を踏まえて，国としてその対策が急務とされている。レビー小体型認知症（以下DLB）は，本邦のKosakaら²⁾が1976年に発表し，その後世界的にも注目され，臨床・病理診断基準ガイドライン³⁾も作成さ

れた疾患で，現在では変性疾患による認知症ではアルツハイマー型認知症（以下DAT）について第2位を占めるとされている。しかし，DLBに関する臨床像は，幻視とパーキンソン徴候以外あまり知られていないのが現状であり，その診断や治療に関する知見も十分とは言えない。今回，DLB自験例25例について，その臨床像をまとめる機会があったのでここに報告する。

対 象

当院通院中のレビー小体型認知症（DLB群）25例（男性12名，女性13名，平均年齢80.0±6.7歳）を対象として，睡眠および自律神経症状に関するアンケート調査を実施し，アルツハイマー型